

改めて、「障害は個性」か？

統括施設長

熊川 嘉一郎

最近、本を読んでいて、あるいは会話の中で「障害は個性」という表現と出会う機会が続きました。この「障害は個性」という言葉はかれこれ数十年ほど前には世に登場しており、ひと頃は半ば論争的と言っても良いほどにその考え方、捉え方について幾多の意見が示されてきました。今更これを取り上げるのもどうかと思いながらも、しかしこれは、多少大袈裟に言えば私たちの支援のスタンスに関係する事柄でもあり、少しばかり触れたいと思います。

この表現に同意する方々の意見としては、大まかに言えば「障害はその人（あるいは自分自身）の心身の一部であり、その人の物事の見方や人格形成、更には生き方に大きく影響を与えているものである以上、それをマイナスに捉えるのではなく、人生を切り開くためのプラス要素（＝個性）として認識したい」といったところでしょう。ひと頃良く使われた「障害を克服して」という、自らの存在と切り離すことのできない障害自体を否定するような言葉に対するアンチテーゼという意味合いもあるのではないかと思います。

一方、それに対して否定的な考え方というのは、「一般的に『個性』とは好ましいもの、大切にしたいものとして語られるものであり、『障害』自体はそれに当たらない。また、依然として社会の中で様々なハンディが横たわる中、障害を個性として捉えることで“そのままが良い”という受け止めになり、問題意識や差別的な社会の仕組みへの改善の取り組みを薄めさせてしまう」といったところでしょうか。障害を纏う中でその方の人格や人生が作られてきたとしても、障害そのものが個性なのではなくその人を形作る属性の一つに過ぎない、というものです。

その双方ともにそれぞれに頷けるものがあります。

では、私たち支援側としてはどのように捉えれば良いのでしょうか。

例えば、ご自身の障害を個性と捉えている当事者がおられた場合、それは「障害」を否定や悔恨の対象としてではなく、自身が前向きに生きるためのプラス思考的な考え方に依り立つものであり、ポジティブな姿勢ともいえます。親御さんが我が子の障害をそのように捉えておられる場合も同じです。ただ、それは障害を現に有している本人であるが故に言えることであって、たとえ励ますつもりであったとしても他者が軽々しく「あなたの障害は個性ですね」などと口にして良いものではないでしょう。ご本人が果たしてどう捉え

ているかということとともに、「自分もそうなりたい」「その個性がほしい」という立場でないとしたら、それはなんとも不自然であり、また、失礼なことです。

普段私たちが障害のある人と接するときには、「障害を（通してその人）見るのではなく、人を見る」ということが当然ながら必要です。障害を通してその人を見てしまうと、往々にしてその人そのものを見誤ります。ただ、支援現場においては幾分異なり、「障害を見る」こともまた、求められます。

私たちが支援という行為を行う場合、その前提において障害特性を理解するということが必要となります。もちろん同じ障害名でもその内容には個人差がありますので、Aさんの自閉症、Bさんの脳性まひ、そしてCさんが有する精神疾患が持つそれぞれの特性を知ることです。そしてその障害ゆえに作業場面で、あるいは生活場面においてどのように制約や困難性に繋がるのかをイメージし、確認していくこととなります。その上で、その障害から生まれる困難さをできる限りカバーする環境を整えて、その方が持つ能力、秘めている可能性を十分に発揮できるようにすることが仕事となります。

そういう立場にある中で、障害そのものを「個性」として捉えるということになると、アプローチすべき対象（障害）がぼやけてしまい、支援の視点が曖昧になりはしないかという思いがあります。時にはその障害が持つ独特の“強み”を活かす支援もありますが、それは個性を活かすというよりも特性としてある強みを引き出す、といったほうがびったりくるように思えます。

その昔、障害を「個性」と主張するに至った背景には、社会からの抑圧や差別、あるいは否定的で冷たい眼差しがあつてのことだったでしょう。障害があるが故に今よりも厳しい状況に置かれていた方々にとって、それは自己肯定感を持つために必要な捉え方であったと言えるように思います。そして、当時に比べれば障害者の社会参加が格段に進んだ現在にあっても、障害のある人たちを取り巻くそれらの障壁は今でも見え隠れしながら横たわり、時として大きく立ちはだかっています。

“障害は個性”かどうか、ということとは別に、障害を個性として捉える（あるいは、捉えたい）ことの背景には何があるのか、ということに思いを巡らせることもまた、必要なことかもしれません。